

ブックトークは至福のひと時

神部 京

町内の小学校でお昼休みの時間帯に3・4年生合同のブックトークを行った時のこと。「着たり 脱いだり かぶったり」というテーマに沿って本を紹介した。紹介した本は順を追って、『おさるとぼうしうり』（エズフィール・スロボドキーナ / 作・絵 まつおかきょうこ / 訳 福音館書店 1970年）、『ワンピース戦争』（丘修三 / 文 杉浦範茂 / 絵 童心社 1993年）、『ズボンとスカート』（松本敏子 / 文・写真 西山晶 / 絵 福音館書店 1992年）、『いたずらおばあさん』（高楼方子 / 作 千葉史子 / 絵 フレーベル館 1995年）、『ダンゴムシみつけたよ』（皆越ようせい / 写真・文 ポプラ社 2002年）の全5冊。

導入は、子ども達に対して「外へ出かける時、何を身につける？」という問いかけから『おさるとぼうしうり』を紹介。はじめにタイトルは敢えて読まず、帽子売りのおじさんが頭にたくさんの帽子を積み上げ町から町へと歩いていくところから読み始める。途中、ひと休みする為に大きな木の下で眠ってしまったおじさんが目を覚ますと、売り物にしていた大事な帽子が無くなってしまう。この場面で、帽子が一体どこに消えてしまったのかと投げかけ、本のタイトルを明かした。

次に紹介した『ワンピース戦争』では、「ワンピースって何？」という声も上がり、こうしたことも見越して着用していったワンピースをお披露目。主人公の小学4年生のジュンが友達のタケちゃんと登校中のこと。2人の横を駆け抜けて行ったのは、ピンクのワンピースを着た同じクラスのゲンタくんだった。そんなゲンタくんの姿を見て度肝を抜いたのは、隣のクラスの男の先生。先生はゲンタくんに向かって、頭ごなしに怒鳴り散らす。そのや

り取りの場面を読み上げると、笑いをこらえていた子ども達の声が図書室中に広がった。

子ども達の開放的な笑いの一方で、先生たちからは少し気まずい空気が漂ってきた。感じ方の温度差を受けながら『ズボンとスカート』へ。この本では世界の衣装が紹介され、イギリスの「キルト」やトルコの「シャワール」など、土地の文化や生活環境による装いについて見ることができる。ここで持ち時間に余裕があれば「元気な仕立て屋」をストーリーテリングで楽しみ、洋服を自分で作ることができるというところから、次の『いたずらおばあさん』へ繋げるやり方もある。洋服を自分で作る人は、人に作り方を教えることもできるので、この本にでてくる元気なおばさん2人、エラババさんとヒョコルさんの出会いを紹介。洋服研究家のエラババさんは、これまでにない不思議な服を発明。その洋服に子ども達も引きつけられている様子が伝わってきた。最後は科学絵本『ダンゴムシみつけたよ』。エラババさんが発明した不思議な洋服は、身につける度に歳が若くなっていくのに対し、ダンゴムシは脱皮を繰り返すことで大きく成長していく。ダンゴムシが好きな子は結構多い。この写真絵本では普段なかなか見ることができない脱皮の様子や、脱いだ殻を食べて栄養を蓄えていることなど発見がたくさんあるようだった。

全ての本の紹介が終わると、子ども達は時間の許す限り紹介した本を手にとってお話の続きを確かめたり、紹介できなかった場面をめくる。また、紹介した本を既に読んだことがある子は、友達にその本の魅力を自分の言葉で伝え、満足しているようだ。子ども達にとって、友達の「この本面白い！」は何よりも説得力と魅力を放つ魔法の言葉なので、更に興味を掻き立てられる。子ども達を前に本を紹介するブックトークには好奇心の連鎖や臨場感がある。まさに、人と本を結ぶ至福のひと時である。
 (かんべみやこ)

読み聞かせからはじまる愛と平和

まっさんこと平田昌広さん、けいちゃんこと平田景さんは「ふたりでいちにんまえ」のメオト絵本作家です。絵本を通して子どもたちに伝えたいことはなんでしょう？
思いのたけを存分に語っていただきました。



まっさん
=以下「ま」



けいちゃん
=以下「け」

読み聞かせを意識した絵本制作

け「まっさん、知ってた？『読み聞かせ』ってことばが好きじゃないって人がいるって。」

ま「うん。『聞かせる』って強要してるように感じるからだね。でも、ほとんどの人に通じる一般的なことばだから、ここでは『読み聞かせ』でいくね。」

け「了解！」

ま「それじゃあ、けいちゃんに質問。読み聞かせのコツってなんだと思う？」

け「コツ？ なんだらう。まっさんは絵本ライブのトークで『読み手が楽しんでいればその楽しさはきっと聞き手に伝わる』ってってるよね。」

ま「うん。ふたりの共作デビュー（2004年）の翌年ぐらいから意識しはじめたんだ。」

け「翌年ってなにをつくってるとき？」

ま「いまはなくなっちゃったけど小学館の雑誌『おひさま』に載せてもらったとき。なんてったって副題が『読み聞かせお話雑誌』だもん。読み聞かせってことをすごく意識した。」

け「あっ、思いだした！『ぼんこつドライブ』（2005年）だね。」

ま「おぼえてる？ あのおはなしが会話だけで書いた初の作品なんだ。」

け「うちの絵本は会話だけで書かれたのが多いけど、あれが最初だったんだね。」

ま「そうだよ。タイトルの下に注記をいれたんだ。『ふだんお使いの方言にするとより楽しめます』って。」

け「それがまっさんのいう『楽しんで読む』ってことだね。」

ま「そういうこと！ 作家によっては一字一句かえないでしっかり読んでほしいって人もいるし、極限まで推敲されてかえようがない文章もある。でもオレは読み手が慣れ親しんでいることばにかえてもらってかまわないし、会話文なら自分のことばにしやすいでしょ？ 読み聞かせのコツはわからないけど、とにかく楽しんで読んでほしい。」

け「うちのホームページにあるもんね。会話文で書かれた作品の全国の翻訳バージョン。」

ま「ファンの方々に訳してもらったんだよね。会話文の絵本っておもしろいでしょ？」

け「そういえば、この記事も会話文だけど、ほんとはまっさんがひとりで原稿書いてるんだよね。私のセリフもね〜」

ま「そういう裏話はいわなくていいの！」

絵本ライブで全国各地へ！

け「ところで、まっさん、うちの作品で会話文といえば、やっぱり『おかん』（2009年）だよな。絵本ライブでは、まっさんがおかん役、私が男の子役。」

ま「男女が逆なのがおもしろいでしょ。原稿を書いているときからイメージしてたんだ。けいちゃんとふたりで読むって。」

け「メオト読みのはじまりだ！」

ま「このころから絵本ライブをするようになって、いまでは全国から呼んでもらえる。2016年には、おかんとおとんの出会い



をかいた『おかんとおとん』もでたね。」

け「最近の絵本ライブではさいごの1冊に選ぶことがおおいね。」

ま「うん。アンコールで『おかん』と『おとん』(2008年)を見せて、お客さんにどちらか選んでもらう。」

け「お客さんとのやりとりは、絵本ライブならではのよね。」

ま「そうなんだ。読み聞かせがうまい人は読むだけで子どもたちをひきつけられるけど、オレらはそんなにうまくないから、参加型の絵本も重要。それで作ったのが……」

け「ことばあそび絵本シリーズ?」

ま「正解!」

愛と平和を伝えたい

け「シリーズ1作目の『ばんつくったよ。』は小学校では鉄板だよね。」

ま「ことばあそびがクイズ形式になっている参加型の絵本だから、子どもたちは答えるのに夢中で收拾がつかないぐらい盛りあがる。」

け「ことばあそびだけど勉強って感じがしないしね。」

ま「絵本の読み聞かせをしている人のなかには『絵本に教育を持ち込むな』って、学習要素がもりこまれた絵本を否定的にとらえる人がいるんだけど、それは違うと思うんだ。」

け「どんなふうにも?」

ま「学習要素の有無なんて関係ないよ。ロングセラーも新刊も関係ない。本選別に正解なんてないと思うよ。誰かが『いい!』って絵本より自分が『いい!』って思える絵本を読んでほしいよね。たいせつなのはその絵本で何を伝えたいかってことじゃないかな。」

け「おっ、なんかいいこといってる! それじゃあ、まっさんは絵本で何を伝えたいの?」

ま「もちろん愛と平和です!」

け「おっ、なんか大きくでたねえ。」

ま「うちの絵本には家族をえがいた作品もおおいでしょ。愛は家族からはじまり、世界が愛で

いっぱいになればきっと平和になる。」

け「ほんとになる?」

ま「簡単だよ。世界中の武器や兵器をせーので捨てるだけでいいんだ。」

け「えーっ! そういうのお花畑主義っていうんじゃないの?」

ま「ことばあそび絵本シリーズの『いすにすわってたべなさい。』(2017年)にあるでしょ。『ほんにはゆめがいっぱいあります。』って」

け「さいごのページでしょ。『こどもたちにもゆめがいっぱい』ってつづくよね。」

ま「ねえ、けいちゃん、おとなが夢を見られなくて、子どもたちに『夢はある?』なんていえないよね。だから、オレは何度でもいうよ。平和なんて簡単なことさ。世界中の武器や兵器をせーので捨てるだけでいい。」

け「夢かもしれない。でも夢じゃないかもしれない……だね?」

ま「世界が愛でいっぱいになっていつかきっと平和になる。」

け「読み聞かせではじまる愛と平和!」

ま「まっさんとけいちゃんの絵本をどうぞよろしく!」

け「どうぞよろしく~っておいっ! さいごは宣伝かーい!」



●おふたりのプロフィール

おはなし担当の平田昌広とおえかき担当の平田景。メオト絵本作家として、『すいかのめいさんち』(すずき出版)、『さかなちゃん』(少年写真新聞社)、『はくたちハダカデバネズミ』(汐文社)など作品多数。それぞれ単独のほかの作家との共作も手がける。また、ふたりで「メオト読み」と称して、全国で絵本ライブを行っている。神奈川県三浦市在住。

<http://office-make.com>

4階の窓から

村岡 純子

私が最初に勤務した小学校の図書室からは富士山がととてもよく見えました。小さな窓の枠におさまり、まるで絵葉書のような眺めでした。でも、特別教室しかない4階にあり、勤めて1週間でやって来た子どもは数えるほどでした。

「こりゃ、いかん！」と思った私は「読書旬間」という図書室が中心になれる学校行事を利用して、図書室のアピールを企てました。まずは「おはなし会」です。いつ・どこでやるかをA5の紙を四つ折りにして仕立てた、小さなノートに書いて配りました。気に入った本の手がかりになるよう、書名と作者名・出版社も書きました。「キャラクター探し」は、物語の登場人物を描いたカードを図書室のあちこちに貼って見つける遊びです。端材で葉を作れるようにもしました。ノートのタイトルには「ひみつ」等の言葉をつけると喜ばれました。子ども達と共有した小さなワクワクです。図書室に来てくれそうなことは何でも取り入れ、おかげでたくさん子どもが小さなノートを大切に持って、図書室に来てくれるようになりました。

伝説のカッパ、現わる！

勤務4年目の、思い出深い企画を紹介します。きっかけは遠野出身の校長先生が赴任していらしたことでした。遠野といえばカッパです。「読書旬間」のすべての企画をカッパに関連させました。ノートのタイトルもずばり『カッパ伝説

秘伝の書』。幕開けは校長先生の語りによる「カッパ話」です。なんと遠野オリジナルの「カッパのマーチ」が流れるカセットプレーヤーを片手に校長室を出た先生は、『ハーメルンの笛吹き男』よろしく、後をついてきた子どもたちと廊下を練り歩きました。「キャラクター探し」はもちろん「カッパを探せ！」、ALTの先生達と

はカッパ語ならぬ「多国言語よみきかせ」、給食の時間の学校放送では「昼の連続小説」と銘打って、なかがわちひろさんの『かっぱのぬけがら』（理論社）を少しずつ読みました。朗読の後はカッパ情報のコーナーです。最初はこちらで準備した「今日、6年生の教室の前が濡れていました。もしかするとカッパが来たのかもかもしれません」といった情報を流していましたが、そのうち子ども達が、家族や近所の人から聞いたという「お寺の天井にカッパの手形が残っているんだって」「カッパに餌付けをしているおばあさんがいるって」等の情報を続々と届けてくれたので、それを流しました。やがて、自発的にカッパ探しをはじめの子まで出てきました。

日程の後半、噂のカッパがいよいよ登場です。「カッパカパパ、カパッパ…」手に持った本をカッパ語で読みはじめたカッパ君に、保護者ボランティアのお母さんが話しかけます。

「カッパ君ごめんね、みんなカッパ語がわからないの。もしよければ、私が人間の言葉でお話ししようと思うんだけどいい？」カッパ君はうなずいて本をお母さんに渡すと、ペタコラと歩いて去り、カッパのペープサートがはじまる、という台本を考えました。もちろんこのカッパ君は着ぐるみです。おそらく子ども達も気づいていたでしょう。ところが「あれは人間だよね」などと言う子はいませんでした。夢中でカッパを探したり、カッパ情報を報告する子たちを他の子がバカにするようなことも、一度もなかったのです。これは素晴らしいことです。

子どもの頃に「あったかもしれないし、なかったかもしれない」経験をして大人になるとそうでないのでは、すごく違うと思うのです。「本」はそうした世界を提供するひとつですが、子どもと本との将来的な結びつきを考える時、

小学生という年齢では本に関わる思い出が、楽しいものとして心に残って欲しいです。「カップ登場」は子ども達にそんな機会を届けられたでしょうか。本の活用を促すだけでなく、本と出会う楽しいきっかけを作ることも学校司書の仕事のひとつではないでしょうか。

学校司書がつなぐもの

実施にあたって、教職員も保護者も、地域の皆さんも、あたたかく対応してくださいました。子ども達が楽しむ姿に誰も水を差すことなく、司書が仕掛けることを信頼して見守ってくださ

いました。ただ、この行事の振り返りシートに養護教諭は「落ち着かない2週間でした」とお書きになりました。

「カップ登場」は、そんな微妙なバランスの上に成り立つ試みだったのです。学校に関わるすべての大人と司書との間に何年かの積み重ねがあって初めて実現する、奇跡のような10日間でした。

学校司書は継続が保証され、学び続けてこそ生きる仕事です。そのことがひとりでも多くの人に届いたらうれしく思います。

(むらおか すみこ：元三島市小学校司書)